

喜んでくれる人がいるから

住民から贈られた作業用のイス。行き会う人と楽しむ缶コーヒーやアメを入れていきます。



花は見る人を笑顔にしてくれるよね

遠藤さん

までいかに拾った種が何箱にもぎっしり

昨年11月には集会所を訪れた八神純子さんも花壇のコスモスを鑑賞。春のチューリップを皮切りに季節の花々を咲かせています。

■東京で仕事をしていて花とは縁がなかったという遠藤由勝さん(大倉)。帰郷して被災、松川第一応急仮設住宅に入居し、お世話になる地域のためにと周辺のごみ拾いから始めたそうです。通院もある中、今も週1回のごみ拾いを続けながら、敷地周囲の花壇づくりに精を出しています。「散歩するお年寄りに喜ばれるのですね」と照れ笑い。きれいに草を刈った場所は、散歩コースから国道を眺められるようにという気配りです。今年は村内自宅の昇口にも水仙を咲かせます。



コスモスを見る歌手の八神純子さんと



episode4



episodes

雪っ娘かぼちゃのパンも

山形県大石田町に避難する鮎川邦夫さん(小宮)一家。平成16年に村に移住し、無農薬有機野菜を栽培。「ご近所とそば打ちしたり飲んだり」と田舎暮らしを楽しんでいました。ゆきさんは、邦夫さんが役員を務める「もりの駅まごころ」のパン職人として邦夫さんにスカウトされ、嫁ぎ先の埼玉県から2人の子どもを連れて単身赴任。「1年が経ち、米粉にも村の暮らしにも慣れた矢先」の震災でした。

避難中、車の燃料が切れて留まった山形で避難生活を形作ってきました。カボチャ「いいたて雪っ娘」を作り広める邦夫さん。米粉パンを作り続け、昨年緊急避難の後、まごころでパンを焼くため再び村に戻ったゆきさんは、全村避難の決定に決意を打ち砕かれます。「心の区切りがつかせませんでした。昨年は子どもたちを連れて一時帰宅。」「知ってほしい。つながりを誇りに思っているんです」。



米粉パンの店「あおいそら」にて左から邦夫さん・美代子さん夫婦。右から渉さん・ゆきさん夫婦

花と人の物語を写す

皆さんの花、また撮らせてくださいな

野口さん

暖かくなったらまた咲かせますよ

伊藤さん(長女)

1月14日、松川第二仮設にて

自慢の花と一緒に。撮影会のようす



「飯館村仮設住宅の皆さんのお花」
©Katsuhiko Noguchi

野口さんは「福島の花」で国際写真コンテスト「ニコンフォトコンテスト2014-2015」写真部門のグランプリを受賞しています。

郡山市在住のカメラマン野口勝宏さん。震災時の記録撮影に取り組む中で、花が被災者を笑顔にする瞬間に出会い、花の持つ力に打たれて「福島の花」を撮り始めました。やがて「この美しい福島を世界の人に感じてほしい」とウェブ上で公開を開始。多くの共感を得て写真展やワークショップの開催が続いています。住民の花が彩る松川第二応急仮設住宅での撮影会は、昨年度「いたてまでいの会」が開いたもので「苦労が多いこの環境で皆さんが咲かせた花。今この時しか撮れない花と笑顔でした」。

いたてまでいの会 村の「いたて大使」の有志と支援者による任意の団体。伝統芸能継承や文化発信のプロジェクトで支援をいただいています。

episode2



episode3

一歩でも確かな復興を進めたい

小宮仮設焼却炉の運営を支える神鋼環境・神戸製鋼共同企業体の中に阪神淡路大震災の経験者がいます。

紅葉も雪景色も星空もいい。実は景色が気に入っています

先陣として復興を一歩でも前へ進めたいと思っています

立石さん

井土さん

村民から贈られた感謝状と地酒を手に

視察に訪れた村民有志から贈られた感謝状です。「全村避難の中で使命を果たす日々。『村の人が見ていてくれる』と明日への励みになりました」と井土さん。「職員皆で感激しました」。

小宮仮設焼却炉運営責任者の井土俊輔さん、運転責任者の立石雅孝さんは、激震地で阪神淡路大震災を経験。一瞬で粉々になった建物や、商店街に上がった火柱のようすが今も脳裏にあると言います。

施設は平成26年から稼働しています。運び込まれるごみの中に、おもちゃや思い出の品々を見かけた井土さんは「これらを捨てる決断をした人は元気で暮らしているのだろうか」と胸がつかえたそう。その思いから「村

の人に会いたい」と、平成27年3月、東京都でのコンサートに参加する「飯館お母さんコーラス」に同行。村の小学生の合唱ステージも鑑賞しました。「支援をお返しする番と思っていたんです。『自分も被災者ですが』と励ますつもりが、歌と元気にすっかり感動して」。以来折に触れての再会もあるとか。「先の見えないうらさが阪神淡路とは違う。一歩ずつでも片付けを進め復興の一助を担いたい」と真つ直ぐに話しました。